
銀の月と銅の星

かぜのあけち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の月と銅の星

【Nコード】

N4010X

【作者名】

かぜのあけち

【あらすじ】

門外顧問組織に所属するオレガノ。

彼女が世話になっていたある組織が何者かによって壊滅した。その原因をさぐりにバジルと共に向かった並盛町で知った真実とは……。以前、GREEにのせたものです。

プロローグ

並盛商店街の中に、小さなイタリア料理店がある。

灯りを押さえた落ち着いた店内は夜という時間と相成って恋人達が多く見受けられた。

その店内の奥、シャマルが黒岩と向かい合わせに座っていた。

二人とも、ここへ入って注文してから何一つ話そうともしない。

しばらくして、店員がシャマルにコーヒーを、黒岩にオレンジジュースを置いて立ち去ると、シャマルがスーツの内ポケットから煙草を取り出した。

「シャマル」

黒岩が顔をしかめてテーブルをトントン、と叩く。

テーブルには「禁煙」の文字と煙草の絵に斜線の引かれたピクトグラムの描かれた小さなボードが貼ってあった。

そのボードを一瞥してため息をつくとき、シャマルは取り出した煙草をしまった。

「俺に煙草をやめろっていつのか」

「あら、その方が健康のためにも良いわよ。仮にも医者なのでしょ
う」

くすくす笑う黒岩に渋い顔を向けながらシャマルはため息ひとつ
いた。

「ごめんなさいね」

オレンジジュースにストローを差しながら笑っていた黒岩が不意に
真面目な顔になる。

「本当はもっと大事な話をするために私を呼んだのでしょうか」

「ああ」

目の前のコーヒートを少しずらしてシャマルは話し始めた。

「正直、平和に暮らしているお前達に頼むのは俺としても気が引け
る。だから、断るなら今のうちだぞ」

「聞く前から断るの？」

「聞いたらきつと断れなくなると思ったからな」
黒岩がシャマルの顔をじつと見ている。それから、ストローでオレ
ンジジュースをかき回しながら言った。

「私に頼み事をするなんて、よっぽどの事なのでしょう。なら、断
る理由はないわ。」

話してもらえるかしら」

「すまないな」

そう前置きをして、シャマルは言った。

「ダフネ・ノーチエを預かってほしい」

黒岩のストローを持つ手が止まった。

「ダフネが生きていたのですか？」

シャマルに訪ねる声が心なしか震えている。

「見つかったのはつい先日の事だ。俺も彼女に会うまでは生きているなんて知らなかった。

ただ、見つかったのはいいんだが、彼女自身精神的ダメージが強すぎてまともに話が出来る状態ではないんだ。

だから、彼女が落ち着くまでお前の方で預かってほしい」

しばらくの沈黙。

黒岩が持っていたストローから手を離れた。

カラン、とグラスの中で氷が音を立てる。

「本当は他の手を考えたかったが、彼女の状態を考えたら昔面倒を見ていたお前に預けるのが一番だと思ってるな」

「…ありがとう」

黒岩が笑う。その笑顔がどことなく寂しそうなのをシャマルは見逃さなかった。

「すまない。だが、お前達の事は俺がこの身に代えても守る。なるべく今の生活を壊さない様にやってみるつもりだ」

「心配しないで。私も子供達もそれなりの覚悟は出来ているから。それに、ダフネが生きていたのですもの、夢幻もきつと喜ぶわ」

そう言つてグラスを手に取るとストローに口をつけた。

シャマルもそれに習い、冷めかけたコーヒーを何も入れずに一口飲んだ。「明日彼女に会わせる。何だったら子供達も一緒に連れて来ていいぞ。とりあえず、礼代わりに今晚俺と付き合わないか」

「どさくさに紛れて私を口説くつもり？」

「俺はいつでも本気だぞ」

「……知ってる。十年來の付き合いだから」

シャマルが怪訝な顔で黒岩を見た。
いつもなら、

「こんな年増を口説いて」

そう言つては笑はずの彼女だったからだ。

そんな彼を見て、黒岩は言った。

「今日は付き合っわ」

予想外のその言葉にシャマルが呆けている。
そんな姿を見て、黒岩は口元を押さえて笑ったのだった。

プロローグ 2

並盛中の屋上で、落下防止のフェンスに寄りかかって夢幻は何も考えずとなく空を見ていた。

(空が高いなあ)

昼休みの屋上、そろそろ午後の授業が始まるせいか、人影はない。

教室と一緒に昼食を取る友人のいない夢幻は昼休みになると必ずここに来て一人で食事をしている。

彼女自身、人が嫌いと言う訳ではない。時々ではあるが、彼女を誘ってくれる人もいる。

ただ一人の方が気が楽、それだけなのだ。

そろそろ戻ろう、そう思って足元にあった空の弁当箱を拾って歩き出そうとしたその時だった。

人気がない屋上に、歌声が聞こえてきたのだ。

どこから聞こえて来るのだろうか、そう思って夢幻が辺りを見回すと、少し離れた所、フェンスの上に一羽の黄色い小鳥が止まっていた。

歌声はそこから聞こえてくる。

どこかで聞いた曲だな、そう思って口ずさんでみて思い出した。

(なるほど、校歌ですか)

黄色い小鳥が並盛中校歌を歌っていたのだ。

その見事な歌い方に、夢幻は感心した。

それにしても、と校歌をさえずっている小鳥を見ながら夢幻は思った。

一体誰がこの黄色い小鳥に校歌を教えたのだろう。これだけ歌えると言う事は何度も歌っているか、聞いているに違いない。

そんな事を思いながら小鳥を見ているうちに、いつの間にか夢幻自身も小鳥と一緒に歌っていた事に気がついた。

一通り歌い終わって黄色い小鳥がパタパタと飛び去っていく。その小鳥を見送って夢幻もまた、教室へと戻っていった。

その次の日。

いつもの様に、屋上にあがると、珍しく人の姿がない。

弁当片手にキョロキョロと辺りを見回してなるほど、と夢幻は納得した。

フェンスに寄りかかって空を見上げている少年の姿があったからだ。

(確か、この学校の風紀委員長だった様な)

この学校に入学して間もない夢幻でも彼の事は噂に聞いていた。

並盛中風紀委員長、雲雀恭弥。

生徒はもちろんの事、先生でさえも彼には逆らえないと言われている。

裏で不良を束ねているとも、気に入らない人間は再起不能にしてしまつとも噂されていた。

そんな彼だけに、誰も関わりたくないのだろう。

彼から少し離れた所に座り、夢幻は弁当を広げて食べ始めた。

食べながら空を見ると、昨日同様、空が高い。

程なく弁当を食べ終え、空になった弁当箱を包むと、それを待つていたかの様に、昨日の黄色い小鳥が夢幻の側のフェンスに舞い降りてきた。

それから、夢幻を見て首を傾げるとお得意の並盛中校歌を歌い始めたのだ。

そんな小鳥に、夢幻はすまなそうに言った。

「今日のごめんね、一緒に歌えないの。その代わりに、君の歌を聞かせてくれるかな？」

夢幻の言葉に、小鳥のさえずりが止まった。夢幻を見てまた少し首を傾げ、パタパタと飛び立っていった。

悪い事をしたかな、そう思いつつ夢幻もまた立ち上がり、屋上を後

にしようとしたその時だった。

不意に、背筋が凍りつく様な気配を感じたのだ。

それなりの場数を踏んでいる夢幻にとつて、それが殺気だと感じるのにももの数秒とはかからなかった。

その気配に、夢幻が振り返る。

振り返った先、眠っているのか目を瞑ってフェンスに寄りかかっている雲雀の姿があるだけだ。

(今の、なんだったのだろう)

あれだけの殺気は夢幻も感じた事はなかった。

いぶかしみながらも、夢幻は屋上を後にした。

その日の放課後。

人気がなくなつた学校の屋上に夢幻は上がって来ると、キヨロキヨロと辺りを見回した。

「やっぱり、来てないよね」

黄色い小鳥が来てないか見に来ていたのだ。

もしかしたら、一緒に歌いたがっていたのだろうか、そう思つてこ

ここに来たのだ。

もちろん、それは夢幻の勝手な想像であって、実際はそうでもないかもしれない。

たかが小鳥なのに、どうしてここまで気を使うのだろうかと思いつつ、そんな自分に夢幻は笑った。

落下防止フェンスから街の景色を見ると、夕暮れの街並みがよく見える。どこからか聞こえて来る「夕焼けこやけ」のチャイムを聞きながらそんな街並みを見ていたその時だった。

パタパタ、と聞きなれた羽音が聞こえてきたのだ。

その音を頼りにフェンスの上を見ると、あの黄色い小鳥が止まって夢幻を見ている。

「さつきはごめんね」

フェンスに止まっている黄色い小鳥を見上げながら夢幻は言った。

「君に言ってもわからないかも知れないけど、私、人前で歌うの駄目なんだ。

だから、周りに人がいない時に一緒に歌ってあげる」

黄色い小鳥が首をかしげて夢幻を見ている。

わかってくれたかな、そう思いながら黄色い小鳥を見ていると、その小鳥が校歌を歌い始めた。

一通り、一番を歌ったところで夢幻を見る。

やはり、一緒に歌ってほしいのだろうか。

「よし、日が沈むまで歌おう」

そう黄色い小鳥に話しかけると、夢幻も一緒になって歌い始めた。

それから毎日、放課後になると夢幻は屋上へと行く様になった。

屋上になると、まず、黄色い小鳥を探す。そして、その姿を見つけると一緒になって校歌を歌うのだった。

そんなある日。

いつもの様に歌っていると、不意に小鳥が歌うのを止めてパタパタと飛び立って行く。

小鳥の飛び立った先を見ると、屋上の入り口に雲雀の姿が見えた。

不機嫌そうな雲雀のその肩に黄色い小鳥は悠々と止まると、のんびりと毛繕いを始めた。

同時に、夢幻はまたあの殺気を感じていた。

まただ、と夢幻は思った。

この屋上にいるのは夢幻以外は入り口にいる雲雀ただひとり。

と、言うことはこのピリピリ来る殺気は間違いなく雲雀から来ている。

るのだろう。

夢幻がわからなかったのは、どうしてその殺気が自分に向けられているのか、と言う事だった。

まだ数えるほどしか会っていない彼に殺気を向けられる理由がわからなかったのだ。

その雲雀が、夢幻の前に来て、言った。

「君、歌わないの？」

何の事かわからずきょとん、としている夢幻に、雲雀はもう一度言った。

「歌わないの？」

不機嫌そうに言う雲雀を見ながら何を、と聞こうとして不意に思い当たった。

「もしかして、校歌を？」

黄色い小鳥が雲雀になついている所を見ると、もしかしたらこの小鳥に並盛中学校歌を聞かせているか、あるいは教えているのは間違はなく雲雀なのだろう。そして、夢幻が小鳥と一緒に歌っているのを何処かで聞いていたに違いない。

歌わないとどうなるか。そう思いつつ、夢幻は雲雀を見て言った。

「私、人前で歌おうとすると声が出なくなるの。だから悪いけど、

あなたの前では歌えない」

本当の事だった。

夢幻自体、歌を歌うのは大好きで小さい頃は人前でよく仲のいい友達と一緒に歌っていた。

それが出来なくなったのは一緒に歌った事でその友達を不幸にしましたから。

「そう言う訳で、私達の邪魔はしないでくれる？」

殺気を無視して雲雀の横を通り過ぎ、夢幻は屋上を後にした。

雲雀もまた、そんな夢幻の後ろ姿をただ黙って見送った。

それからだった。

夢幻が屋上に上がって小鳥と歌っている時、雲雀が屋上に来る事はなかった。

ところが、夢幻が用事などで屋上に来られない次の日の昼休み、まるで夢幻が来るのを待っていたかの様に雲雀がそこにいて、

「今日は歌わないの」

と、聞いてくるのだ。

そのくせ、夢幻の返事を待たずにいなくなってしまう。

(一体、何なのやら…)

でも、と夢幻は思う。

もしかして気を使っているつもりなのだろうか。

それとも、ただ歌が聞きたくて催促しているのだろうか。

どちらにしても、こっちの事情なんて考えていないんだろっとな、そう思いながらもなるべく時間の許す限り、屋上へと上がるのだった。

そんなある日。

夢幻が家の用事で早く帰らないといけないため、その日は屋上へと行かず、まっすぐ校門へと向かっていた。

そんな夢幻を呼び止める者があった。

「お前だな、風紀委員長の前で歌わない生意気な女は」

その声に、夢幻が振り返った。

数人もの学生服の男達が夢幻を睨み付けている。その腕には「風紀」の腕章がこれ見よがしに付けられていた。その一人が夢幻の前に立ち、睨み付ける。

「痛い目に合いたくなければ、大人しく言う事を聞くんだな」

「大人しく?」

「委員長の前で歌えばいい事だ」

いつの間にか夢幻の回りには彼らを取り囲んでいる。そのただならない雰囲気は他の生徒達はただこの様子を遠巻きに見ているだけだ。

「こっちは急いでいるの。どいてくれる？」

夢幻も負けてはいない。目の前にいる男の一人を睨み付け、その脇をすり抜けようとする。

その前を、男が数人立ちふさがった。

「一つ聞きたいんだけど」

なるべく冷静さを保ちつつ、夢幻は聞いた。

「これって、あなた方の言う風紀委員長があなた方に頼んだ事なのかしら」

「お前が知らなくてもいい事だ」

「て、事は雲雀さんは知らないのね」

もし雲雀が彼らに命令したのなら夢幻は彼に対して失望していただろう。それに、もしこんな事を命令するのなら夢幻が屋上で彼の前で歌うのを断った時点でやっているはずだった。

言う事を聞かない、なんてのはただの言い訳なのだろう。ただ、目の前の人間が思い通りにならないのが気に入らないだけに違いない。

そう考えたら夢幻を取り囲んでいる男達に腹が立った。

ブレザーの内ポケットに手を入れると、そこから愛用の武器、鉄扇を取り出した。

「あなた方が力づくで私を連れて行くと言うのならこっちもそれ相応の事をしますよ」

男達に戸惑いを含んだざわめきが広がる。まさか、目の前の女子生徒が武器を手に反抗するとは思っても見なかったからだろう。

一触即発の雰囲気、この様子を遠巻きに見ていた生徒達も固唾を飲んで見守っている。

先に動いたのは相手の方だった。

男のひとりが夢幻に飛びかかってきたのだ。

男の手が伸びて夢幻の胸ぐらに掴みかかるようにする。

その手がブレザーの襟を掴む寸前、夢幻は軽く後ろに避けて男の手を思いつきり持っていた鉄扇で弾いた。

男が打たれた手を押さええずくまる。

同時に、周りにいた男達が色めきたった。口々に叫んでいる。

「大丈夫か!!」

「あの女、下手に出ればつけあがりやがって!!」

「もう容赦しねえ!!」

そんな男達を見ながら夢幻もまた鉄扇を構えた。

ひと悶着ありそうなこの光景を誰もが固唾を飲んで見守っていたその時。

「お前ら、何やっているんだ!!」

不意に、男達の後ろで怒号が飛んだ。

男達の姿に隠れて声の主は見えない。しかし、男達の間になんか一種の緊縛感が漂っている。

もしかしたら彼らより偉い人なのだろうか。

夢幻がそう考えているうちに、男達の間からひとりの男性が現れた。髪をリーゼントにしてこの学校の物ではない学ランを着ている。その姿は一昔前の番長と言ったところだろうか。

彼を見て男達が口々に「草壁さん」とつぶやいている。

その草壁が男達を睨みつつ、静かな声で言った。

「お前達、何をしている」

「草壁さん、実はこの女があまりにも生意気なものでちょっと締め上げるつもりでした」

「誰がそんな許可を出した？それに、今のお前達はそんな事をして
いる場合ではないだろう」

静かな声だが、その声には逆らえない何かを夢幻は感じた。

その言葉に、男達が一斉に直立不動の体制を取り、

「申し訳ありませんでした！」

草壁に向かって頭を下げた。

男達が校舎へと去っていくと同時に、遠巻きに見ていた生徒達も安心半分、残念半分で蜘蛛の子を散らしたかのようにいなくなっていた。

周りに人がいなくなったのを確認して、草壁が夢幻に頭を下げた。

「申し訳ありません。自分がいながらあなたを危ない目にあわせて
しまいました」

「別に、あなたが謝らなくてもいいのでは」

「いえ。あの者達の不始末は自分の責任でもありません」

「こっちは構わないわよ。売られた喧嘩は買うだけだから」

その答えに、草壁はただ困った様な笑いを浮かべるだけだった。

それからしばらく、草壁の姿を校内のあちこちで見かける様になっ
た。

放課後屋上に上がる時。

家の用事で早く帰らないといけない時。

さりげなく彼の姿を見る様になった。

そのせいだろうか、夢幻に喧嘩を仕掛けた風紀委員の男達の姿を見る事がなくなった。

初めは少し迷惑だと思っていた夢幻だったが、その草壁の様子を見ているうちに、何となく彼の人となりがわかり始めてきた。

何しろ、その現れ方が本当にさりげなく、夢幻の行動を妨げていないのだ。

見た目と違って案外繊細なところがあるのだろうか。

半ば迷惑ながらも、そんな彼を視線の片隅で追いかけていた自分に、夢幻は少し笑った。

そんな日々が一週間も続いた頃、夢幻は思いきって草壁を屋上へと呼んだ。

「風紀委員副委員長の草壁さん、もう私の護衛はいりませんよ」

目の前にいる彼が風紀委員副委員長の草壁だと夢幻が知ったのはつい二、三日前の事だった。あの時、彼がなぜ夢幻に謝ったのかわからなくて彼女自ら調べたのだ。

「ところで、私の護衛って、雲雀さんに頼まれた事なのかな？」

「いえ、自分が勝手にした事です。あなたが歌う校歌は委員長のお気に入りなものですから」

やっぱり、と夢幻はつぶやいた。

同時に、こんないい人を従えている雲雀を少し羨ましくも思った。

「まあ、そんな事だろうとは思っていたけどね」

それから、草壁を見て言った。

「もし迷惑でなければ、今度デートしてもらえませんか」

留学生バジル

空を見ながらバジルは額の汗を袖でぬぐった。それから、手に持った木の桶を地面に置くと柄杓で水を撒き始めた。

イタリアの郊外、ボンゴレファミリーが所有する別荘のひとつに日本家屋風の屋敷がある。

ファミリーが所有している別荘の中では比較的小さい方だと言われているものの、その広さはその辺りに建っている別荘とは比べ物にならない位見事なものだ。

平屋立ての屋敷は畳の敷かれた部屋がいくつもあり、先日畳を入れ換えたのだろう、い草の気持ちいい香りが漂っている。

部屋にはそれぞれ庭がついていて、あるところには大きな錦鯉のいる池がついていたり、またあるところには大きな桜の木があったりと、それぞれ日本をテーマにした庭になっていた。

その別荘の入り口でバジルは何するとなく打ち水をしていたのだった。

この暑さでは打ち水をしてもそんなに涼しくはならないかもしれない、そんな事を考えながら水を撒いているバジルに声をかける者があった。

「精が出るわね、バジル」

「お疲れ様です」

バジルに声をかけたのは同じ組織の仲間であるオレガノだった。ス
イツに身を包んでいるものの、バジルほど汗はかいていない。

「親方様はいらっしゃるかしら」

「先程帰って来ました。オレガノが帰って来たらすぐ来る様に言っ
てました」

「わかったわ。そうね、もしかしたらバジルにも手伝ってもらおうか
もしれない」

また後で、そう言うと中へと入って行った。

オレガノの言葉を気にしつつ、桶を持って残りの水を全て撒き終え
ると、中へと入って行く。

日差しの遮られた室内は外より幾分かは涼しい。

入り口のホールを抜け、奥に入ると、小さな土間が出る。そこに桶
と柄杓を置いて手を洗っていると、程なくオレガノが入って来た。

「親方様がお呼びよ。やっぱりあなたにも手伝ってほしいみたい」

「わかりました。すぐ行きます」
奥にひととき大きな和室がある。

十畳ほどの大きさのそこは枯山水の庭園があり、わびさびの趣をか
もし出している。

入り口で靴を脱いで上がると、親方様こと沢田家光が待っていた。

そして、バジルが家光の前に来て正座するのを見ながら話を切り出した。

「早速だが、オレガノと一緒に並盛町に行ってほしい」

「並盛町ですか」

並盛町と言えば、ボンゴレファミリー十代目であるツナこと沢田綱吉が住んでいる町だ。

「沢田殿の身に何かあったのですか」

「まだそこまでは行ってない。ただ、その可能性も否定出来ないかな。そこで、オレガノと一緒にそのあたりを調べてほしい。すでにこちらからの手配は済ませてある」

そうやって家光はバジルの前にポン、と何かを置いた。

バジルが手に取りそれを見た。

それは、小さな手帳だった。

紺色のビニールのカバーがかけてられていて、左半分が透明になっている。

透明なカバー越しに書かれた内容から、それが写真の貼っていない並盛中学校の生徒手帳だと言ったことがわかった。

「表向きは留学生として動いてほしい。ただし、ツナ達に本当の目的は内緒でな」

「沢田殿や守護者の皆さんには話せない事なのですか？」

「今の所はな。だから、こちらで処理出来るうちはこちらで済ませ
ておきたい。いいな」

わかりました、と言ってバジルはうなずくと、持っていた生徒手帳
をしげしげと眺めた。

「嬉しそうだな」

そんなバジルを家光がニヤニヤしながら見ている。

「いえ、そんな事はありません」

自然と思った事が顔に出たのだろうか。

遊びに行く訳ではないのだから、そう自分をたしなめて気を引き締
めた。

「構わないさ、むしろ学校生活を楽しんで来るがいい。こつ言つた
事も大事だぞ」

バジル自身は幼い頃から家光について仕事をしているため、勉強は
主に通信教育と仲間達から教わっている。

「調査はちゃんとやります」

そう言いつつ、内心、初めての学校生活にわくわくしているバジル
だった。

「詳しい話はオレガノから聞くといい。今回の仕事は彼女に全て任

せてあるからな」

「了解しました」

家光に一礼をして立ち上がると、そのまま、バジルは和室を後にしたのだった。

オレガノ先生

「今日からイタリア語の臨時講師を勤めます、オレガノと言います」
彼女の姿を見たたん、教室中がどよめいた。

無理もない、今まで年配の神経質そうな講師に代わって若くて美人の講師がやって来たのだから。

オレガノの調査先はここ、並盛町でも偏差値の高い学校で有名な女子中である私立緑中学校だった。

表向きはこの学校のイタリア語臨時講師である。

「中学校で教えるのは初めてなので私の授業でわからない事がありましたら遠慮なく言って下さい。私も、この学校やこの並盛町の事とか色々と皆さんに聞きたいですから」

教室中がシン、となる。

その時。

生徒のひとりがパチパチと拍手した。

それを合図に他の女子生徒達も戸惑いながら拍手を始めたのだ。

教室中が拍手に包まれる。

まだ、緊張感がただよっているものの、どうやらこのクラスの子供達はオレガノを受け入れてくれたようだ。そんな雰囲気を感じながら

らオレガノはホツとした。

とりあえずこのクラスとならやっていけそうだった。

彼女がこの学校に来たのは、ある少女を探すためだった。

二週間程前、ボンゴレファミリー傘下のあるファミリーが部下もろとも惨殺された。

犯人はそのファミリーのボスが可愛がっていたひとりの少女だと言われている。

十年程前にイタリアで迷子になっていた所を保護、両親が見つからなかったため、ボスの養子縁組をする矢先の出来事だった。

その後の調査でこの日本にいる所まではわかったのだが、それ以降の足取りはようとしてつかめなかった。

それが数日前、並盛町のこの学校の生徒として在籍している事がわかったのだ。

少女の顔立ちは知っているものの、ここでは当てにならない。彼女を日本へ手引きしたものがいる以上、顔を変えている可能性があるからだ。

その相手が誰なのか、また何人関わっているのか、そこまではわかっていない。

その日は何事もなく学校での一日を終え、校門を出るオレガノに声をかける者があった。

「先生、今帰りですか？」

その声に振り返るとひとりの女子生徒の姿があった。

ポニーテールの髪がよく似合う活発そうな少女に心当たりがあった。教室で始めに拍手してくれた生徒だ。

「あなたはええと…三浦ハル、さん」

「ハルでいいです」

女子生徒　ハルはそう言うてにっこりと笑った。

「先生は日本に何度もいらっしやっていますのですか？」

「どうしてそう思ったの？」

何の警戒心も持たないハルのその笑顔に、オレガノもつい笑顔になる。

「日本語が上手でしたから、もしかしたら、と思ったんですよ」

「日本にはあまり行ってはいないのだけど、日本人の知り合いがいるのでその方から色々教えてもらったの」

オレガノの尊敬する上司である日本人を思い浮かべながら彼女自身、嘘は言っていないとひとり、納得している。

「では、この並盛町は初めてですよ。それなら今日はハルがこの町をご案内します。美味しいケーキ屋さんやかわいい洋服を売っているお店は好きですか？」

屈託のないその話し方にオレガノもつられてまた笑顔になる。

「そうね、美味しいケーキ屋さんは大好きよ。あと、日用品などがそろつ所も教えてもらえるかしら」

「はひつ、喜んでご案内しますっ」

そう言つてオレガノの前を歩き始めた。

(初めてではないのだけど…)

前に行くハルの後ろ姿を見ながら、喉元まで出かかったその言葉を飲み込んだ。

今、それを言った所でまず理由を聞かれるだろう、それならここは初めてだと言つた方がいい、そうオレガノは判断した。

学校を出てしばらく歩くと並盛商店街の方に出る。その中を歩きながらハルがまず案内したのはケーキ屋だった。

「ここがこの町で一番美味しいケーキ屋さんでえす…あれ、京子ちゃん」

ハルが立ち止まった。

店の前、黒板のまえで立ち止まって見ている女子生徒がハルの声に顔を上げた。

ブレザーの制服からどうやら並盛中の生徒のようだ。

「ハルちゃん」

「やっぱり京子ちゃんですう。京子ちゃんもケーキ屋さんですか？」

「ふふつ。今日はミルフィーユが三割引って書いてあるから、今から買おうかと思って」

「本当ですかあ？あ、でも今新しくこの町に来たオレガノ先生をご案内中ですのであとで買いに行きます」

「じゃあ、売り切れちゃうといけないからハルちゃんの方も買っておいてあげる」

「もし良かったら」

オレガノが話を切り出した。

「私もそのミルフィーユ、お土産にしたいから、一緒に買ってほしいかしら」

「それじゃあ、みなさんで買しましょう」と、ハルが嬉しそうに言った。

美味しいケーキ屋とハルが言うだけあって店の中は混雑している。三人がそれぞれミルフィーユを買って店を出るとハルがオレガノの持っているケーキの箱を見て訪ねた。

「先生、ケーキそんなに食べるのですか？」

オレガノの持っているケーキの箱はハルや京子の持っているそれより大きい。

ミルフィーユ以外にも他にケーキを買ったためだ。

「それもあるけど、これは日本の知り合いの方にあげるためのケーキです」

「お知り合いがいらっしやるのですか？」

ハルが不思議そうな顔で聞いた。この町は初めてだと思っているからだろう。

「イタリアでお世話になっている方のご家族がこの町にいるの。この後ご挨拶に伺おうと思って」

オレガノの言うご家族とはもちろん、家光の家族の事だ。

家光やバジルから話を聞いて一度沢田家に行つて見たいと思つていた。

今がそのタイミングかもしれない。

「イタリアの方なのですか？」

二人の話を聞いていた京子がオレガノに訪ねた。

「ええ」

「今日、私のクラスにもイタリアからの留学生が来たんです。その子が私やハルちゃんの知っている友達だったのでびっくりしました」

「ハルの知っている友達ですか？」

京子がこっくりとうなずいた。

「ツナ君達もびっくりしてた。ハルちゃん誰だかわかる？」

「ええと……」

少し考え込んでからその友達に思い当たったらしい。にっこり笑って答えた。

「わかりました、バジル君ですね」

「ハルちゃん大当たり。今日この後ツナ君の家で宿題するんだって言うってた」

「ハルもバジルさんに会いたいですう」

そう言うってからオレガノの方を見て説明を始めた。

「バジルさんはツナさんのお友達でツナさん達と一緒に相撲大会に出ていたんですよ。何も言わずにイタリアに帰ってしまったのでちゃんと挨拶出来なかったのが心残りだったんです」

「そうだったの。それでは町の案内は次の機会にして今からその彼に会いに行かれてはいかがでしょう」

「でも、ハルが町を案内するって言いましたから、そんな事は出来ません。先生を案内してからでも大丈夫です」

自分が言った手前、そんな申し訳ない事は出来ないのだろう。そう

思ったオレガノはハルにこう提案した。

「それでは、私もこの後知り合いの方の家にいきますので、道案内をお願い出来ますか？住所はここなのですが」

ジャケットのポケットから住所の書かれてある紙片を取り出すとハルに見せた。

紙片の住所をハルがまじまじと見ている。その住所に思い当たったのだろう、満面の笑みを浮かべてその紙片を返した。

「ハルこの住所知っています。ここ、ツナさんの家ですよ」

「やっぱり。バジルの名前が出たからもしかしたらって思ったの」

「バジル君の知り合いなのですか？」

今まで黙って話を聞いていた京子がオレガノを見て訊ねた。

「彼から皆さんの事は聞いています。あなたは笹川了平さんの妹の京子さんですね」

京子がその言葉につなずいた。

「あらためてご挨拶いたします。私はハルさんの学校の臨時講師をしておりますオレガノと言います。その節は弟のバジルがお世話になりました」

そう言って二人に頭を下げた。

ここ並盛町に行くにあたってオレガノとバジルは姉と弟と言う事に

なっている。

ハルと京子がそろって頭を下げた。

「それでは、ご挨拶もすみましたので、皆さん、ご一緒に行きましょつか」

オレガノの言葉に二人そろって「はい」と返事を返した。

京子が見た日常

話はその日の朝に遡る。

校門の近くにある楠の大樹の前で京子は心配そうな顔でその木を見上げていた。

彼女の視線の先、だいぶ上の枝に子猫がうずくまっていたのだ。どうやら木の上に登ったものの、降りられなくなったらしい。

近くにいた生徒の何人かも為すすべもなく、彼女同様木の上をただ呆然と手をこまねいて見ているだけだ。

誰か人を呼ばないと。そう思ってあたりを見回したその時だった。

京子の横を誰かが通りすぎたのだ。

そのまま彼女の目の前で軽々と木に乗り、枝から枝へと飛び移って行く。そしてあつという間に子猫のいるところまでたどり着いてしまった。

落ちない様幹につかまりながら子猫を捕まえようと手を出している。

その様子に見入っていると、後ろで京子を呼ぶ声がした。

「ツナ君」

京子のクラスメイトであるツナこと沢田綱吉がそこに立っていた。

「おはよう、京子ちゃん。どうしたの、木なんか見上げて」

「あのねツナ君、その木の上に……」

そう言って楠の上を指差したその時だった。

京子とツナの見ている前で子猫がその手をすり抜けて下へと落ちて来たのだ。

下へ落ちる寸前、木に上った人物がどうにか子猫を受け止める。と次の瞬間、バランスを崩して枝から滑り落ちたのだ。

「ツナ君！！」

京子が悲鳴をあげるのと同時にツナの姿が彼女の視界から消えた。

「いってえ……」

「も、申し訳ございません……沢田殿」

京子の足元で仰向けに倒れたツナにおおいかぶさる様にしてその人物が倒れている。

その声に聞き覚えがあった。

背中を打って痛そうにしているツナもその声を聞いて誰だかわかった様だ。

「バジル君？」

「申し訳ありません。今どきますので」

そう言つて立ち上がるとツナの手を取つて立ち上がらせた。それから、倒れた時に付いた背中の中の砂をはらつていく。

「大丈夫ですか、十代目」

「ツナ大丈夫か？」

その様子を少し離れた所から見ていた獄寺と山本が駆け寄つて来た。獄寺の手にあの子猫が抱きかかえられている。下へと落ちる寸前落ちた衝撃で子猫がつぶれる恐れがあつたためバジルが獄寺の方に放り投げたのだ。

「一体何が…つて、お前バジルじゃないか」

獄寺がびっくりしている。
なぜならツナの隣にいたのは並盛中の制服を着たバジルだったからだ。

「皆さんお久しぶりです。今日からお世話になります」

涼しい顔でにっこり笑つて頭を下げるバジルに皆が何も言えずにいた。

ボンゴレファミリアNo.2の組織である門外顧問組織「CDEF」

マフィアの組織No.2に所属している少年が自分と同じ制服を着

てここにいる。

どうしてここに、そうツナがたずねようとしたその時。

それを妨げるかの様に予礼のチャイムが鳴った。

「え、もうそんな時間？」

ツナがあわてて校舎へと走って行く。その後ろ姿に向かってバジルは手を振った。

「あとでお会いしましょう」

その言葉通り、ツナのクラスにバジルは留学生として転入して来たのだった。

休み時間、ツナの隣の席になったバジルの席の周りには、ちょっとした人だかりが出来ていた。

留学生、しかもイタリア人と言う事で始めは様子見をしていたクラスメイトだったのだが、少し古風な話し方ながらバジルが日本語が話せる事、そしてツナの知り合いだとわかって警戒心が解けたのだから、徐々に人が集まり始めたのだ。

京子の友人である花が京子の席にやってくると、人だかりが出来ているバジルの席の方を見ながらため息混じりに言った。

「それにしても、沢田の周りって、変わり者が多くない？」

「そうかな？」

「そうよ。あのスーツの赤ん坊と言い、牛柄のうざいガキと言い、そしてあの古風な話し方をする留学生でしょう。京子、もう少し男を選んだ方がいいわよ」

悪くは言っているものの、その口調には悪意が含まれていない。

「花そんな事言ったら駄目だよ」

そう言いながら少し前の席に座っているツナの方を見た。

そのツナも獄寺や山本と楽しそうに話している。

「じゃあ、放課後よろしくね」

「え？」

「忘れたの？英語の参考書買いに行くから付き合ってたって言ったじゃない」

「大丈夫。覚えてるよ」

「全く」

半ば呆れた様子で苦笑するとじゃあね、と言って自分の席へと戻って行った。

席に戻る花に小さく手を振りながら京子はもう一度ツナの方を見た。

次の授業がもうすぐ始まるせいかツナとバジルの席の周りには誰もいなくなっている。

京子の見ている前でツナとバジルが話している。

とぎれとぎれ聞こえて来る話の内容からどうやら帰りにツナの家で宿題をするのでバジルも一緒に誘っている様だ。

楽しそうに笑っているツナを見ながら京子は次の授業の準備を始めたのだった。

日だまりの家

オレガノ、ハル、京子の三人がツナの家に着くと、ツナの母親である奈々が出迎えてくれた。

京子とハルはそのまま二階のツナの部屋へ、オレガノは居間へ通されて行く。

居間へと通されたオレガノはその光景に驚き、そして感心した。

居間のテーブルに雑誌を広げていたのは毒蠍のビアンキ。

居間から見える中庭でボール遊びをしている子供達は、ランキングブックのフウ太、ボヴィーノファミリーのランボ、ギョーザ拳の使い手イーピン。

みなその世界では名うての者達ばかりだ。

しかし、ここで見る限りどこにでもある平和な家庭の光景にしか見えない。

「今お茶入れますね」

奈々が台所へお茶を入れに行くと同時に、ビアンキが雑誌から顔を顔を上げた。

「あら、オレガノじゃない」

「お久しぶりです、毒蠍のビアンキ。日本の生活はいかがですか？」

「愛する人がいればどこにいても天国よ。でも珍しいわね、あなたがイタリアを離れてここにいるなんて」

「私もそう思います」

今回の調査はオレガノ自ら家光に頼み込んだの事だった。

殺されたファミリーのボスはとても世話好きな人で、身寄りのない、または貧しくて学校にも行けない子供達を集めては勉強会をしていた。

字の読めない子供には文字を教え、

計算の出来ない子供にはそろばんを教え、

時々自分の部下も子供達と共に勉強会をする事もあったと言う。

オレガノもその中で子供達に勉強を教えたり、教えてもらっていたりとしていた。

そんなオレガノを名門大学に行かせてくれたのも、門外顧問組織に推薦してくれたのも、そのファミリーのボスだった。

彼がいなければ家光の秘書としてのオレガノはいなかったかもしれない。

無理を承知のお願いではあったのだが、家光は快く承諾してくれたうえにバジルまでつけてくれたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4010x/>

銀の月と銅の星

2011年11月5日09時23分発行